

今日は、「わたしは常に主をわたしの前に置く」という題で話をします。

今日は、旧約聖書を読んだ後、詩編16編を唱えました。この詩編は、イエス様より1000年前、ダビデが、まだイスラエルの王様になる前、自分の仕えたサウル王に迫害を受けていた時の経験から、作った詩だと言われています。

ダビデは、この苦しい時の経験から、『サウル王による迫害の中で、神様との交わりがすべての喜びの源である』、ということを書いているのです。ダビデは、この詩編で、神様に「わたしは神様にずっと従いますから、わたしを守ってください。」と祈り、その結果、自分には豊かな恵みの生活が与えられた、と歌います。そのような、神様への信頼の言葉の中心になるのは、8節目でしょう。

「わたしは絶えず主を思う。神はわたしの右におられ、わたしは揺るがない」と言っています。

これを、口語訳聖書で読むと、はっきりしています。

『16:8 わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない。』

「わたしは、いつも神様をわたしの前において最優先し、動じることなく神様に、右に倣えの生活をします。」と言っているのです。

それで、今日は、「わたしは常に主をわたしの前に置く」ということを考えたいのです。

さて、わたしたちは、神様をわたしたちの前に常に置いているのでしょうか？

日本基督教団の牧師だった、榎本保郎という先生は、とてもおもしろいことを言われています。

わたしたちは、毎日の生活で、はたして神様をどこに置いているだろうか。「前なのか」「後なのか」「あるいは足の下か」「上の方か」「横においているか」と問われるのです。

これは、たとえだと思いますが、そのひとつひとつの榎本先生の話が面白いのです。

「後に置く」とはどういうことか。

それはいつも自分が先で、自分のために神があり、神は自分を助けてくださるかたにすぎない。だから「わたしはこれをしたいです。神様どうぞさせてください」と呼びかけるだけの信仰にとどまってしまう、というわけです。どんな信仰なのでしょう。「ご利益宗教」みたいな生き方なのでしょう。あるいは、政治権力を握るために、宗教を利用しようという生き方もこれに入るのでしょうか。

前のアメリカ大統領、トランプさんは、イスラエルの首都をエルサレムだ、と主張して、アラブ諸国の反発を買いました。それなのにこの主張をやめなかったのは、アメリカのユダヤ人たちの組織から支持してもらいたいためか、あるいはキリスト教原理主義の人々からの支持をとりつきたいからではないか。宗教を利用しようとしているように私には見えました。

次に、「上に置く」とはどういうことか。

それは神を奉ってしまうことである。そして本当にわたしたちの生活のまんまん中に主を迎えようとしていない。だから、信仰は言葉だけになってしまい、実際の生活とはすこしもかかわりがないということになってしまう。したがって家庭あるいは職場といった日常生活においては、牧師といっても人間なんだからというようなことで、信仰はごまかされてしまい、神は単に教会で礼拝するだけのかたになってしまう。と榎本先生は説明します。

これがどうして「上に置く」ことになるのか、わたしも少し考えたのですが、わたしなりの理解は、「日常生活では、神様を棚上げにしてしまう」というイメージだろうか、と思います。教会でこそ、まじめなクリスチャンとして、お祈りしているけど、一歩教会から出たら、それまでの敬虔な姿勢は、忘れて、棚上げして、無宗教のように振舞う姿勢です。

さてそれでは、上ではなく「下に置く」というのはどんなものなのか。

榎本先生の説明では、これは、上に置くのとは反対で、日常生活の中に埋没してしまうような信仰、と言っています。それ以上の説明がないので、わたしの想像ですが、足で踏みつけるわけですから、「自分はクリスチャンである」ということを否定して、足で踏みつけることなのでしょう。

昔、日本でクリスチャン迫害の時代、「踏み絵」というのがありました。「わたしはクリスチャンではありません。キリスト像なんか足の下に置いて、踏みつけます。」という生き方ですね。上に置く人は、まだ神様を上におくだけ、その存在を認めているのですが、下に置く人は、クリスチャンであることを、忘れたいと思っているのでしょう。

さて、「後ろ」「上」「下」と来たら、次は「横に置く」ということです。

もともと、詩編16編の後半「神はわたしの右におられ、わたしは揺るがない」という場合の「右におられる」という意味とは違います。「右におられる」とは、「神様の救いを確信している」ということ。ちょっと余談になりますが、本来は、「神の右手」という言い方があって、これは「一番頼りにしている家来」という意味です。日本語でも、「彼は私の右腕だ」という言い方があります。

エルサレムに神様の神殿があった時、神殿は私たちの教会とは違って、東から入って、一番奥が西になりました。そして、その神殿の南側に、イスラエルの王様の宮殿がありました。これは、神様が東を向いて座しているとすると、神様の右側に、王様の宮殿がある。つまり、「神の右」とは、神様に次ぐ最高の座のことを指すのです。ニケヤ信経や使徒信経で、イエス様が天に昇ったあと、「父の右に座しておられます」というのは、そんな神様に次ぐ高い地位に立った、ということなのです。

しかし、それじゃ「神はわたしの右におられる」というのは、神様が私の家来なのか、ということになりますが、そうじゃありません。右の者は、力があって、私を守ってくれる、救助者という意味があるのです。右腕とも関連があるでしょう。それと「横に置く」のは、まったく違います。

「神様を横に置いておく」というのは、良くないたとえです。

榎本先生は、これを「相対的な世界の中で神を考えていく生き方で、いつまでたっても信仰は与えられない」と説明されます。「キリスト教はこうだ」「仏教はこうだ」「イスラムはこうだ」と、比較するだけで、その神様に信頼を置こうとはしない態度です。ただ、学問として眺めているだけで、積極的に、主体的に神様と向かい合う姿勢がない、さめた態度のことです。

それでは、詩編が言うように、神様を「前に置く」とはどういうことか。それは、神様が、私を導くかた、私の従うべきかた、となることであって、同時に、自分が後に下がるのです。

今日の旧約は、アブラハムが神様の命令に従い、息子イサクをいけにえとしようとするお話。そして、福音書は、イエス様をご自身の苦難を覚悟されて、弟子たちにも自分の十字架を背負うことを勧められた箇所です。どちらも、従うことの難しさを示すお話でした。

アブラハムのことだけ考えても、従うというのは、難しいことですが、「わたしは常に主をわたしの前に置く」と歌って平安を得たダビデのように、神様への信頼を獲得する修行が必要なように思えました。